

宮崎県の生活綴方教師・木村寿(八)

～児童詩教育における童謡の位置～

一、文集『ヒカリ』『ひかり』の中の童謡

木村寿が土々呂小学校で出していた学級文集『ひかり』(二年生)には、野口雨情、北原白秋、相馬御風らの童謡が数編掲載されている。数編とは言え、生活綴方教師・木村寿の文集に童謡が掲載されている事実は興味を惹く。創作指導の対象は既に『赤い鳥』時代に童謡から児童自由詩へと転換し、生活綴方は『赤い鳥』を、言い換えれば白秋を否定するところから出発していたからである。否定されたはずの童謡を木村寿はなぜ『ひかり』に載せたのか。掲載されているのは、次の六篇である。

*『ひかり』第八号(昭和八年一月)

北原白秋「氷のひわれめ」「落ちたつばき」

*『ひかり』第九号(昭和八年三月)

北原白秋「子どもの村」、相馬御風「春」、

浜田廣介「草のかげ」

*『ひかり』第十五号(昭和八年十一月)

野口雨情「日本よい国」

『ひかり』第八号・九号は一年生の三学期の文集、第十五号は二年生の二学期の文集である。したがって童謡が掲載されたのは『ひかり』のみであり、木村が童謡を何らかの理由で児童に読ませたいと思ったのは一年生の終わりから二年生までということになる。

しかし、一年生の初期の文集『ヒカリ』にも、童謡は形を変えて掲載されている。第一号(昭和六年六月)は、次のような詩で始まる。

アツチ ノ マチ ト

コツチ ノ マチ ト

タイコバシ カケタ。

アカイ ズンゾ ハイテ

ミンナ デ ワタラウ。

アノ コモ ワタレ、

コノ コモ ワタレ、

菅 邦男

ニジ ノ ハシ タカイゾ
テテ ヒイ テ ワタレ。

アツチ ノ マチ ト
コツチ ノ マチ ト
タイコバシ カケタ。

題名・作者名も記されていないが、これは野口雨情の童謡「虹の橋」の改作である。

*野口雨情の原作

虹の橋

あつちの町と
こつちの町と
太鼓橋かけた

この子も 渡れ
この子も 渡れ
仲よく渡れ

赤い草履ぞんぞはいて
みんなで渡らう

虹の橋 高いぞ
手手ひいて渡れ。

『十五夜お月さん』所収)

木村寿は雨情の童謡を改作して、創刊号の巻頭に掲げたのだ。童謡は一年生の初めから二年生まで、つまり低学年に必要なだと考えていたことになる。

木村の改作を原作と比較してみると、原作にあった第三連の「仲よく渡れ」が省かれ、第一連が繰り返されている。全体的なリズムを整えるためだろう。

『ヒカリ』第一号はリズムに満ちている。児童の作品が記載されたページの上段には、挿し絵付きで木村寿の文が載せられている。例えば次のようなものである。

アメガヨクフル オホブリ コブリ
ハナガ ウツムク クサガ ネル
オヤマガ、ミンナ アライ キモノヲキタ。
ボクノ ナツフク アタラシイ

一年生には音数律によるリズムが必要だと考えが見て取れる。木村が童謡を低学年の文集『ヒカリ』『ひかり』に織り込んでいるのも、同様の意味があるのだろう。当然のことながら、白秋・雨情・御風の童謡はリズムに満ちている。

『ひかり』第八号（昭和八年一月）には、北原白秋の童謡「氷のひわれめ」「落ちたつばき」の二篇が掲載されている。「氷のひわれめ」は表紙をめくった最初のページに、「落ちたつばき」は裏表紙の裏に書かれている。子どもたちの作品は、言わば白秋の二編の童謡に挟まれて在る。表記は原作どおりではなく、「氷のひわれめ」は漢字をすべてひらがなに直し、「オチタツバキ」には一部書き直しもあり、カタカナ書きを、これもすべてひらがなに直している。

こほりの ひわれめ

北原白秋

こほりの ひわれめ
つきよ には、
ぴちぴち おとして、
つめたい な。
こほりの ひわれめ、

うら たんぼ、
びち びち おとして、
かぜ が ふく。

おちたつばき

あかいつばきが、
ぼたりとおちた、
すこしそつぽむいて、
ちへいにおちた。

北原白秋

しべが白くて、
つやつやしてる。
きろいくわふんは、
いつぱいつゆだ。

おちたつばきが、
見てるとうごく。
かぜがふつかけ、
もみがらつけた。

これらの童謡が、リズムに満ちていることのほかに共通しているのは、いずれも自然が対象になっていることである。浜田廣介の「草のかげ」も、相馬御風の「春」も自然を描いている。

草のかげ

浜田廣介

目だかのおうちは
ちらちらあさ日の
つーばな あかばな
いちにち うつつて
るりいろ そらも
とんびのまひまひ
ちらちらおよいで
目だかのおめめは
草のかげ
ささのつゆ
やなぎのは
草のかげ
よくみえる
よくみえる
日がくれりや
もうねむい。

*浜田廣介の原作

草のかげ

目高のおうちは
草のかげ
ちらちら朝の日
笹のつゆ

るり色お空も
よく見える

とんびの舞ひまひ
よく見える

茅花^{つばな}あか花
やなぎの葉
いち日うつつて

草のかげ

ちらちら泳いで
日がくれりや
目高のお目めは
もうねむい

『ユドモアサヒ』（朝日新聞社 大正十三年夏）
『日本児童文学大系 13 浜田廣介』（ほるぶ出版）

『ひかり』の作品と原作では、二連と三連が逆になっている。一連も「ちらちら朝の日」が「ちらちらあさ日」となっている。これは単純ミスではないだろう。意識的な書き換えと思われる。原作では第二連が目高の視点で水中からるり色の空やトンビが舞っている様子がよく見えるという解釈も可能だが、木村寿の改作では、第二連で茅花やあか花柳の葉が水に映っているので、同様に「るり色の空やトンビが舞っている」様子も水に映った情景だということになる。そういう意味では木村寿の改作の方が視点が安定していると言える。その方が、子どもたちは情景を無理なくとらえることができる。木村寿の綴方教育は観察の綴方だったが、児童詩においてもそれは変わらない。自然や生活を見つめることが基本である。

相馬御風の「春」は二ページ見開きで書かれているが、これも題名どおり自然を描いている。長いので一連のみを挙げておく。

春

相馬御風

めをだした めをだした
かきのたねが めを出した
わたしの うめといた

かきのたねが めを出した

（第一連）

第九号の裏表紙の裏には菊池知勇の作品が書かれているが、これも椿を題材としたものである。

つばきのつぼみ

菊池知勇

かぜにふかれる
つばきのつぼみ

はつばのかげの
つばきのつぼみ

かぜにちらちら
かほだすつぼみ

『ひかり』第十六号には、参照のために「よその子供の詩」十九編が載せられているが、題名だけを述べてみると、「月」「かがみ」「がけ」「けしき」「水たまり」「みち」「石」「春」「道」「しかられたこと」「くつ」「そり」「えんとつ」「やね」「朝やけ」「夕日」「川」「川の水」「古い家」と、圧倒的に観察した詩、それも自然を対象としたものが多い。心情を述べたものは「しかられたこと」くらいで、木村が何を意図していたかは明瞭である。

ただ、野口雨情の「日本よい国」は傾向が異なっている。表紙をめくると、次のような童謡がある。

日本よい国

野口雨情

日本よい国
さくらがさいて
明るのお国よ
うれしいな

日本よい国
お米がとれて
ゆたかなお国よ
うれしいな

日本よい国
君が代八千代
めでたいお国よ
ばんざいばんざい。

野口雨情の「虹の橋」も改作されていたが、「日本よい国」も同じものとは思えないほど書き換えられている。

*野口雨情の原作

日本よい国

日本よい国 亜細亜の東
稜威かしこし 万乗の君の
しろしめす国 われ等のほこり
たたへてたたへて 朝日はのぼる

神武建国 遙に遠く

歳を重ぬる 二千と五百
思ひ見るだに いと尊きを
たたへてたたへて 朝日はのぼる

富士の高嶺に 降る雪は
清く照り映え 千古に残り
春の吉野は 万朶の桜
たたへてたたへて 朝日はのぼる

日本よい国 名さへも床し
五穀豊かに 草木茂り
うれしからずや われ等の国土
たたへてたたへて 朝日はのぼる

右剣左鏡の 大精神は
大和島根の 基となりて
進む正義に 国威は揚り
たたへてたたへて 朝日はのぼる

見よや天地に 輝く平和
光あまねく 四海にみちて
美風良俗 よい国日本
たたへてたたへて 朝日はのぼる

『報知新聞』（昭和八年一月六日）
『定本 野口雨情 第二巻』

『ひかり』第十五号の「日本よい国」は、恐らく原作の第三連、

第四連、第六連あたりを基に書き直したのであろう。それにしても見事な改作である。改作の方が子どもにははるかに分かりやすい。原作は「神武建国 遙に遠く 歳を重ねる 二千と五百」といった言葉に時代を感じさせるが、改作にそれはない。木村が子どもに伝えなかったのは、そのような「時代」ではなかったのだろうか。

前述した雨情の童謡「虹の橋」は、童謡集『十五夜お月さん』に収録されている。西条和子は『十五夜お月さん』（教養文庫 社会思想社）の解題で、「郷土の自然や子どもの伝習的な生活に題材を求め、その様子を生き生きと描いた作品や、又悲しみの感情と深い哀憐の情を内に抱えた作品などが収録され、雨情独自の世界が色濃く映し出されている童謡集であり、集中には傑作も多い。」と述べている。「郷土の自然や子どもの伝習的な生活に題材を求め」た童謡に木村寿は惹かれたのだ。

二、北原白秋と木村寿の「提言」問題

『ひかり』第九号には、もう一編、北原白秋の童謡「子どもの村」が、目次の後の狭いスペースに短く書かれている。

子どもの村

北原白秋

子供の村は 子供でまもろ
 みんなでまもろ
 てんでのしごと てんでにたすけ
 みんなで はげまう

*白秋の原作

子供の村

子どもの村は子どもでつくる。

合唱 「みんなで作る。」

赤屋根、小屋根、ちらちらさ

合唱 「みんなで住まうよ。」

子どもの村は垣根なぞよそよ。

合唱 「ほんとによそよ。」

草花、野菜、あつちこつち植ゑて、

合唱 「すず風、小風。」

子どもの村は子どもできめよ。

合唱 「みんなできめよ。」

村長さんを一人、みんなを選び、

合唱 「みんなで代る。」

子どもの村は早起きばかり、

合唱 「鶏トリと起きて。」

朝の中、御本。お午から外へ、

合唱 「はたらいて歌はう。」

子どもの村は子どもで護る。

合唱 「みんなで護る。」

てんでの仕事、てんでにわけて、

合唱 「みんなで励まう。」

子どもの村は仲よし小よし、

合唱 「喧嘩いざこざせずに。」

てんでに助け、てんでに仕へ、

合唱「楽しんで遊ぼう。」

子どもの村はお伽の村よ。

合唱「お夢の里よ。」

星の夜、話。月の夜、お笛。

合唱「すやすや眠よよ。」

子どもの村はいつでも子ども、

合唱「いつでも春よ。」

子どもの祭、おてんとさんの神輿^{みこし}。

合唱「わつしよ、わつしよ、わつしよな。」

(原作は総ルビ)

*注 初出は『赤い鳥』第九巻二号(大正十一年八月一日)。

初出題は「子どもの村」

原作を改作したというより、木村はこの第五連を、童謡の内容を要約した連として抜き出しのだろう。南方小学校時代(昭和二年)の教え子である黒木道男氏は、木村寿が「子どもの村」をオルガンに合わせて児童に歌わせていたと言っている。無論原作ではなく、木村寿作の方であろう。それを木村はまた土々呂小学校でも教えている。白秋への深い思い入れがあったのである。

その「子どもの村」を、同じ生活綴方教師で全国的に指導的な立場にあった寒川道夫が、「早今日は『子供の村は子供で作る』の時代ではない。」と切り捨てたことがあった。昭和十一年に起きた白秋の「提言」をめぐる問題である。

昭和十一年、『赤い鳥』以来、久々に『綴り方倶楽部』誌上で児童詩の選者を務めることになった北原白秋は、『綴り方倶楽部』(昭

和十一年六月号)誌上で、ある提言を行った。その冒頭で白秋は「児童自由詩の正統に立ち、茲に私は提言する。」と述べ、綴り方倶楽部の詩の選者として「本来の此の児童自由詩の正統としての真精神」、つまり『赤い鳥』の児童自由詩の精神を「本誌の詩壇に於て再び基準し、顕揚」することを宣言した。そして行動詩や散文詩等の「新自由詩」を批判した。

これに対して寒川道夫は『綴方生活』第八巻第八号(昭和十一年十月)に「提言を切る——新興児童詩前進のために——」と題する論文を書き、白秋が児童自由詩を童謡からの発展として認めていながら「今、提出され、実践の軌道にのる新興児童詩を、発展した型として肯定する事が出来ないであらうか。——然り、白秋氏にそれを要求する事は無理なのだ。それは唯に、氏が童詩の世界から遠のいてみただけではない。氏は既に時代と共に歩む事を止めたのである。」と手厳しく批判した。「提言」をめぐる白秋と寒川の論の是非については、ここでは置く。

問題は、寒川の「提言を切る」に先立って「提言」に対する批判検討が他でも行われており、そこに木村寿も回答を求められていることである。弥吉菅一氏の「白秋の『提言』に対する批判の検討」(『日本児童詩の歴史的研究 第三巻』所収 溪水社)によれば、昭和十一年の『國・語・人』七月号(伯西教育社)は特集「北原白秋提言批判」を組んでいる。全国各地から二十六名の綴方教育関係者に回答を求めているが、弥吉氏によると「当時、児童詩教育の一流のメンバーである」とのことである。その中に木村寿もいた。詳細は同著に譲り、ここでは木村寿に関してのみ見ていくことにする。白秋の提言は、五項目にわたってなされている。

①児童自由詩発生の真相を認識しその精神と表現とに就いて、正統たる斯の道を守持し、開顕する。

②此の理由に於て、その以外の短歌・俳句の創作指導と発表とを排除する。

③所謂散文詩の作品発表を排除する。無論児童へのその創作態度心の理由をも否定する。

④課題詩の問題。題詠といふことは本来詩作の第一義ではない。

⑤鑑賞詩に就いて。此の鑑賞詩欄もこのまゝ存続してよろしい。たゞ、一旦は私の眼を通さして貰ふ。

木村寿の回答は次のようなものである。

北原氏の児童自由詩の正統の立場から、実際指導者への提言にはうなづかれる点があります。

1 ともすれば社会認識といふ立場から、社会の一部分の人の提言供した問題を正しい批判なしに、児童の生活にもつて来やすい人に。

2 又半解な文学精神によつて、俳句をやり和歌を指導せねば、この道に取りのこされるやうな心持で、色々の指導を実施してゐる人々に。

而し、私は児童の生活を豊富にするといふ立場から、正しい精神による俳句、並に和歌の指導は学年相応には、創作鑑賞させていゝと思ふ。三年にも二年にも和歌俳句の限定指導は私も否定する。和歌・俳句と限定せず、また観念なしに、児童生活に見る発生的なもののみとめていゝと思ふ。

北原氏の提言には、私たちは一考も二考もすべきものがある。

全体的に好意的な回答と言えよう。特に「1 ともすれば社会認識といふ立場から」に注目させられる。木村寿の指導作品には、児童詩にしる綴方にしる、生活を見つめさせながらも社会問題や政

治的な問題は出てこない。子どもの世界に政治性を持ち込むのを否とする姿勢が、この回答にはつきり見て取れる。

次に注目されるのは、白秋が否定した「短歌・俳句の創作指導と発表」を肯定していることである。むろん白秋は短歌や俳句そのものを否定しているわけではなく、「少くとも指導者たちのそれぞれの好尚と趣味とによつて、直に成人同様に之等の創作を児童に強ふる事は児童詩教育本来の精神に反するものである。」との懸念を示しているのだが、木村寿も「正しい精神による俳句、並に和歌の指導は」と条件をつけており、白秋と正反対の考え方をしているわけではない。「2 半解な文学精神によつて」とは、白秋の言う「それぞれの好尚と趣味とによつて」と同義であろう。木村寿自身短歌を作っており、文学精神に通じているとの自負でもあろう。

いずれにしろ、短歌や俳句に限らず「児童の生活を豊富にする」ために「観念なしに、児童生活に見る発生的なもののみとめていゝと思ふ」というのが木村寿の考え方であった。木村が児童自由詩を指導しながら、文集に白秋や浜田廣介等の童謡を載せていたのはこのためである。わらべ唄を基調とする童謡は、まさに「児童生活に見る発生的なもの」である。

北原白秋は「子供は自然界のあらゆるものと遊ぶ。驚き喜びつつ遊ぶ。だから彼等の周囲のありとあらゆるものが一緒に歓声をあげて光り輝き乍ら彼等と一緒に遊びの炎となる。子供の頭髮は光り、幼い霊は遊びそのものとなつて光る。このすばらしい交歓状態の中に自然に子供の歌謡が生れるのだ。」(「童謡復興」「芸術自由教育」大正十年一・二月号)と述べているが、木村寿の言う「発生的なもの」とはまさにこの意味である。

木村寿には白秋の影響を受けた節がある。提言批判検討の回答で「北原氏の提言には、私たちは一考も二考もすべきものがある。」との答えもその表れであろう。

白秋は童謡の創作において「真の思無邪の境涯にまでその童心を通じて徹せよ」「恍惚たる忘我の一瞬に於て、真の自然と渾融せよ」と言う。また「此の境地は、自然観照の場合に於ても、終には芸術の本義と合致する。童謡に於てのみならず、詩歌俳句に於ける究竟道と同一である。」「竹は竹である。児童もかくのごとく観る。児童は単に観る。而も直覚する。成人は細かく観る。而も深く内外に徹する。然し乍ら、何れも竹は竹として観るより外はないのである。」(同前)とも述べている。木村が南方小学校で始めた自然観察の綴方は、この白秋の言に通じるものがある。自然や生活を見つめ、そこから発生的に綴方が、詩が生まれる、これが木村寿の綴方教育の根幹である。

木村寿の白秋への傾倒を示すものに、岡富小学校で同僚だった青木幹勇の証言がある。青木は、木村寿の自宅で、当時高価だったアールズ版白秋全集が並んでいるのを見たと言っている。木村は白秋の著作を、全集を揃える程までに読んでいたのである。

昭和六年には『赤い鳥』(第一巻第六号)に童謡を投稿している。同誌には「童謡童謡選外佳作 ○木村壽」とある。選者はむろん白秋である。選外佳作なのでそれがどういふ作品だったかは分からないうが、自身童謡を書いて選者である白秋のもとへ送っている事実は注目される。木村寿が野口雨情等の童謡を大胆に改作して文集に載せているのも、自分自身が童謡を書いていたからだろう。

昭和八年には土々呂小学校の児童の作品を『赤い鳥』に投稿し、四篇掲載されている。ただしこの号から選者は鈴木三重吉になり、木村がそれを承知で投稿したのか、白秋選だと思って投稿していたのか、それは不明である。また、これが『赤い鳥』への最初の投稿だったのか、以前にも投稿しながら採用されなかったのか、それも分からない。が、昭和八年段階においても木村寿に『赤い鳥』が意識されていたことは事実である。

三、白秋の童謡観と「発生的なもの」の妥当性

白秋は、明治以降の教育が伝統的なわらべ唄や遊戯を廃して西洋化したことを「全く明治以来の教育は在来の美風を破壊したばかりか、未だ以てこれはといふ建設も企てられて居らぬ。」(同前)と厳しく批判している。「自然に必然に子供そのもの、感覚感情から生れて、自ら形になつたもの」である遊戯やわらべ唄を廃し、学校唱歌や西洋体操を強制したために、子どもの生活は日常生活と学校生活とに二分され「維新後の日本の子供を過つて了つた結果になつた」というのだ。「この不自然極る教育唱歌は現在に於てもなほその恐ろしい錯誤を繰り返している」と言い、「学校に於ける遊戯は野外に於ける郷土的児童の遊戯を根本にして、更に新時代のものたらしむべきであつたのだ。」と主張する。故に「ここに於て童謡復興の宣伝が必要になつて来る。」つまり、童謡が必要だと言っているのである。

これについては教育学者の山住正己も、「音楽取調掛の仕事にみられる重大な問題点の一つは、日本の伝統音楽の基本であるわらべ唄は卑俗であるとして学校唱歌から排除したところにある。そのころ、わらべ唄は子どもの遊びと密接に結びついており、これを無視することは、歌を子どもの生活から遠ざけてしまった。」(『子どもの歌を語る』岩波新書)

「日本の伝統的な音楽文化の基本はわらべ唄であり、こういう音楽を忘れず、それをふまえながら、ヨーロッパはじめ諸国・諸民族の音楽としっかり向き合うというかまえが、洋楽導入を重視した音楽取調掛、ついで東京音楽学校の指導者たちには残念ながら、というより、やむをえなかつたのだが、はなはだ弱く、それが音楽教育を作り上げるうえで弱点となつていたのである。」(同前)

音楽研究家の小島美子は、発声法の観点から、この問題について論じている。日本の学校はクラシックの音楽家のような頭声的発声

法で「頭のとっぺんから出るような声を出しなさいと指導している」が、子どもたちが『せっせっせ』や『かごめ』や『花一匁』を歌う時には決して頭声的発声法では歌わないのだと言う。

「これらの声は日本語も明快で、伸び伸びと自然で美しく解放された声である。かなりの音量もある。(略)そして日本の歌の声の原点はこれである。」

「日本の学校では、まず子どもたちのわらべ歌の声を基本にすえ、そこから民謡の声へと連なる線を中心に教えるのが自然であろう。

(略) 歌を歌うときには必ずクラシックの声を出せという要求は、日本人の子どもたちには不自然なので、多くの子どもたちが音楽の授業で歌うことに抵抗を感じている。だから頭声的発声になじめない子どもは、歌うことに恐怖を感じたり、自分は歌は歌えない、音痴だと思いつまされたりしている。」

〔音楽から見た日本人〕NHKライブラリー
小島美子も白秋と同じ見解である。音楽家の立場から見ても「自然に必然に子供そのもの、感覚感情から生れて、自ら形になつたもの」(白秋)が基本なのである。

したがって、「児童生活に見る発声的なもの」を尊重し、児童詩(生活綴方)を指導しながらも童謡を歌わせ読ませていた木村寿の姿勢は、極めて妥当なものだったと言えよう。

四、詩精神の要求

木村寿の指導作品は、生活や情景の単なる写生ではない。生活を自然を見つめる目を培いながらも、自分自身短歌を作っていた木村は、あくまで詩を詩として見、児童の詩に詩精神を求めていた。その基本に童謡があった。

『綴方学校 尋常二年』(鑑賞文選)の後継誌)昭和六年二月号には、木村が岡富小学校時代に指導した詩「すゞめとかがし」と、

同じ案山子を題材にした岐阜県の児童の詩「たんぼのかかし」が並んで掲載されている。

すゞめとかがし

かがしが立つた

にらんだかがし

すゞめはにげる

しやべつてにげる

かがしの着物は

あかい着物

すゞめはおどけて

にげてゐる

かがしはくる目で

にらんでる。

たんぼのかかし

たんぼのかかしはさむいだらう

まいにち一人でくらすのか

すゞめはかかしにこはがつて

むかふの森へにげてゆく

かかしの足はかたほだね

ほんとに足がだるいだらう

かかしはたんぼのるすばん

宮崎県東臼杵郡岡富小学校
尋常二年 井上正信

岐阜県恵那郡落合小学校
尋常二年 男子

かかしはほんとにやくにたつ

共に擬人化されているが、「たんぼのかかし」は「たんぼのかかしはさむいだらう」とか「ほんとに足がだるいだらう」「かかしはほんとにやくにたつ」と、観念的である。

それに比べて岡富小の「すゞめとかがし」はユーモラスで、ある種のストーリー性がある。童謡と言っても良い。詩としてのレベルの差は歴然としている。

寒川道夫は「我々の献身すべき問題は、如何に子供が現実の探求にうち向かつてゐるかといふ事であり、如何に燃えてゐるかといふ事である。」(「提言」を切る)と述べているが、木村寿の児童詩はイデオロギーにあるのではなく、あくまで詩としてあつたのである。

(二〇〇七年九月三〇日受理)

※参考文献

- 『日本児童文学大系 13 浜田廣介』1977.11 ほるぷ出版
 『定本 野口雨情』全8巻 未来社
 『十五夜お月さん』教養文庫 2002.5 社会思想社
 『白秋全集』20・26・33・34 1987 岩波書店
 復刻版『綴方生活』けやき書房
 弥吉菅一著『日本児童詩の歴史的研究 第三卷』1989・2 溪水社
 復刻版『國・語・人』祥文社
 山住正己著『子どもの歌を語る』1994.6 岩波新書
 小島美子著『音楽から見た日本人』1997.7 NHKライブラリー